

令和7年度奈良市立伏見こども園研究実践概要

園長 馬路 有理
全園児数 156名

1. 研究主題 つながりが育む豊かな心 ～対話から子どもの心を探る～

2. 研究年度 2 年度

3. 研究主題設定理由

子どもの豊かな心を育むため、R6年度より子どもがひと・もの・こととの関わりの中で心動かしている姿を捉え、その要因を探ってきた。そして、子どもは自らひと・もの・ことと出合い、関わりを通して目の前の興味のあるものから目の前にないもの、目に見えないものへと視野を広げ自分でひと・もの・こととの新たな関係を作り出しながら自らの世界を広げていることがわかった。本年度は子どもがひと・もの・ことに関わる際、心をどのように動かしたのか、子どもの心が豊かになるとはどのようなことか、子どもに関わる人との対話の中で明らかにしていきたいと考え、主題を設定する。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

ひと・もの・ことに対して関わり、子どもがどのようなことをきっかけにして心を動かされているのか、それはどのような心（感情・思考等）であったのか、対話を通して捉え、子ども理解を深める。

②研究の重点

- ・でいあシート（HP 参照）のエピソードから子どもの心の動きをキーワードで捉え、「感情」「思考」に分類することで、3歳児から5歳児の心の育ちを検討する。
- ・子どもの心の動きについて捉える際に、多角的な視点から捉えられるよう、保育者間、子ども達、保護者との対話を通して探る。

③活動の方法

3歳児・4歳児・5歳児、1年間の実践事例から子どもの心の動きを捉え、キーワード化したものを付箋に書き出す。その際、ひと・もの・ことに対する子どもの主体的な反応を「感情」、関わろうとする行動に生じる意思決定を「思考」とし、分類する。（別図1）。感情は年齢があがるにつれて正と負が明確になってくると考えられることから負の感情を別に示す。また、学年があがるにつれて「感情」「思考」の育ちを検討する。

_____ 子どもの心が動いた部分 （キーワード／感情 負の感情 思考）

事例①『みんなで食べよう』3歳児 いちご組 10月

石を拾って金網の上ののせていたA児。B児は湿った砂をお玉で掬ってのせている。A児「これ焼いているねん」（**楽しさ**）、B児「見て見て」と、近くにいた保育者に伝える。①「何を焼いているの？」と尋ねると、B児「これ、マシュマロやねん」（**楽しさ**）と話し、石や砂を少しずつ金網の上ののせていく。そこへその様子を見たC児が来て「おいしくなるように塩もかけるねん」と、小石を焼いていた石や砂の上にふりかける。（**興味・意欲**）今度はC児「団子も焼きたい」と、丸形の計量スプーンで泥を掬って金網の上ののせる。（**意欲**）A児もスプーンで繰り返し砂をのせていく。B児「焼けてきたで」、A児「先生も一緒に食べよう」と言ったので保育者も一緒に金網を囲むと、A児「みんなで食べよう」と、さらに声を掛けた。（**楽しさ・嬉しさ・喜び**）①「いい匂い、おいしそう」と石を手にとったり、砂を掬ったりして食べ、「焼けていておいしい」と伝えると、3人は顔を見合わせ微笑んだ。

<考察>

個々の子どもの見立てを肯定的に受け止め、その世界と一緒にいる保育者の存在は子どもにとって安心感となった。また、近くにいる友達にも目を向け、同じようにやってみようとする気持ちが生まれるとともに、見立てるもののイメージに合わせ道具を使う意欲も見られた。さらにA児の「みんなで食べよう」という言葉が保育者と3人の空間を一つにし、一緒に遊ぶ嬉しさや喜びが膨らんだ。

事例②『ダンゴムシいた！』3歳児 みかん組 10月

ダンゴムシ探しが好きだったC児は、2学期に入り「ダンゴムシいない」と話していた。10月、廊下で遊んでいたC児がいつもダンゴムシを見つけていたオシロイバナの茂みで、生まれてすぐの小さなダンゴムシを見つけ「ダンゴムシいた！」と、驚いたように言った。(驚き・嬉しさ) その声を聞き、D児、C児がやってきた。C児は手に持ったダンゴムシを見て「ちっちゃい」と言い、D、E児も「うわぁ赤ちゃん」と、すぐにオシロイバナの茂みに目を向けた。小さいのですぐには見つけられなかったが、じっと見ると小さく動くダンゴムシを見つけ、D児が「いたよ」と言った。

飼育ケースを一つ用意すると、手にとってはケースに入れ夢中でダンゴムシを探した。(楽しさ・期待) ダンゴムシの本を見て、食べる物を知っていたC児達は、葉っぱやコンクリートの欠片などを(愛着・親しみ) ケースに入れ、手に乗せたりダンゴムシが動く様子を一緒に見ていたりした。(物の共有)

<考察>

・ダンゴムシに親しみや愛着をもち探していたが、しばらく見つけることができなかった。その分、見つけた時の喜びや嬉しさを感じた。また、本等から得た知識から、ダンゴムシの大きさに気付いたり食べる物を探して与えたりする姿につながったと考える。また、個々にダンゴムシを探す行為を楽しんでいるものの、1つの飼育ケース(もの)を共有することで見ている対象が同じになり、友達と一緒にする楽しさを味わうようになった。

<3歳児考察>

- ・個々の子どもを肯定的に受け止める保育者の関わりが信頼関係を構築し、それは安心感となり、心の土台となった。安心感があることで子どもは、身近にあるものや目についたことに心が動かされ、触ってみたり使ってみたりするようになった。そして、その時に起こる出来事に対し、感じたり気づいたりしたことをしぐさやつぶやき等で反応し表し、保育者がその反応を受けとめ言語化することで子どもは自分の中の楽しさや嬉しさ等の喜びの感情を知った。
- ・気になる身近なもの・ひと・ことに目を向け、関わろうと行動することで気付きや面白さを感じていた。その中で新たに知ることや小さな違いへの気付きは経験や知識となっていた。

事例③『お客さんを楽しいて思わせたい』4歳児 さくら組 9月

衣装を作ったり、カーテンにリボンの飾りをつけたりし、ステージごっこを楽しむ中で、お客さんに見てもらいたいという気持ちが芽生えた。(楽しい) 1学期に5歳児からチケットをもらい招待されたことを思い出し、F児は「チケットを作ったから持って行ってくる」と5歳児の保育室に行った。(憧れ) その様子を見ていたG児に①「お客さん来てくれるかな？」と話しかけると、G児は「お客さんが楽しいて思えるようにしなくっちゃ」と椅子を並べ始めた。B児を見て周りの友達も椅子を並べたり、「積み木でステージと分けよう」と区切ったりし、お客さんが集まるとステージが始まった。G児は「ペンライトを振ったらもっと楽しくなるよ」と、作っていたペンライトをお客さんに渡した。(楽しんでほしい) たくさんのお客さんが来てくれたことを喜び、とても盛り上がった。(喜び)

その日の話し合いで、G児は「お客さんに楽しいて思っほしくて、ペンライトを作った」と話した。(楽しんでほしい) ①「お客さんが楽しいて思うには、もっとどんな風にしたいい？」と尋ねると、「うちわがいいかな」「みんなにチケットを渡して、楽しいことしてるよってお知らせしたい」と話していた。(もっと楽しくしたい)

<考察>

衣装を作ったり、踊ったりすることに自分自身が楽しさを感じていた。見ってもらいたい気持ちの芽生えとともに、1学期の経験や憧れからチケットを作りお客さんを呼ぶことで、お客さんを楽しませたいという気持ちへと変化が見られた。お客さんが楽しさを感じられる方法を考えたり、必要なものを作ったりしたことを話し合いで共有し「もっと楽しくしたい」という思いから楽しくなるように考えることで、さらにお客さんが楽しめると感じ、考え方が変わっていった。

事例④『誰があけたんやろ』4歳児 たんぼぼ組 11月

H児が「先生、きれいでしょ」と落ち葉に開いた穴から覗いて言った。穴越しにH児と視線を合わせ、①「きれい、穴、開いてるね？」と言う(嬉しさ・楽しさ) と、H児は葉を確かめるように見て、「開いてる」と言った。(気付き) 近くにいたI児もその声を聞き「けど、こっちのは開いてないな」と、他の葉を見つけ始めた。(不思議) ①「何で穴が開いてるんやろ？」と声をかけると「アリが食べてん」とJ時。H児も「アリが落ちた葉っぱに来て食べたんじゃない？」「ダンゴムシかも」と話した。

遊びの後の話し合いでH児が穴開きの葉のことを伝えると「トンボの羽が当たって穴が開いたんじゃない？」「ちっちゃい丸い穴はトンボのしっぽが刺さったんや」「はらぺこあおむしみたいに幼虫が食べたのかな？」「ダンゴムシやったら、パリパリの落ち葉を食べるよな」と、想像したり知っていることを思い出したりして伝え合った(興味・想像する面白さ) が、結局答えは出ずに話し合いが終わった。翌日も木の下で穴開きの葉を見つけていたH児とJ児がふと見上げた時「先生！落ちてない葉っぱにも穴開いてる！」(気付き・なぜ?・広がる想像) と言い、保育者も「いっぱいあるね」ということは、ダンゴムシは違うな」「誰が開けたんやろ？」と友達と一緒に話しながら落ち葉を集めた。(興味・面白さ)

<考察>

・H児が覗いた葉っぱの穴を「穴が開いている」と保育者が言語化したことでその場にいた子どもたちの注意は落ち葉の穴に向けられた。また、開いていない葉があったことは、開いているのはなぜかと理由を考えるきっかけともなった。理由については、自分の経験や知っていることを結び付けたり、想像したりし、友達の考えを聞くことでさらに想像が膨らんだ。

<4歳児考察>

・自分が楽しいと十分に感じるようになり「こうしたい」という思いを言葉で表すようになった。言葉に表すことで友達と思いを共有することにもつながった。また、今まで蓄えた様々な感情や経験を使い、相手も自分と同じ気持ちになってほしいと想像したり、考えたりし、行動していた。
・出合ったもの・ことに対し、経験や知識があることで不思議に感じたり疑問をもったりした。それに対し想像して考えたり考えを言葉で友達や保育者に伝えたりすることで、答えを求め調べるような追究ではないが、友達と想像したり予想したりし、考えの幅を広げていた。そして、その友達や保育者とのやりとりが経験や新たに知ったことの確認となり自信になった。

事例⑤『喜んでくれるかな?』5歳児 そら組 5月

「ウォータースライダーや」と言いながら伏見スライダーの斜面に水を流し、自分も滑って遊んでいると、楽しそうな姿を見て4歳児もやってきた。それまでは自分が滑る分だけの水を汲んで流していたが、4歳児も滑れるように「かけてあげるね」とK児が優しく水を流すと(優しさ)4歳児は嬉しそうに笑いながら何度も滑ることを楽しんでいった。しばらくすると、伏見スライダーの下に水が溜まり、4歳児が着地時に水しぶきが上がる楽しさを感じていることに気付いたL児が「大きい水溜まりにしたらもっと嬉しいと思う」と水を運び、水たまりに入れ始めた。(相手を思いやる)4歳児はウォータースライダーを滑って水しぶきが上がることを楽しみ、5歳児は水をかけたり運んだりする中で4歳児が喜んでくれる嬉しさを感じていた。(自分の行動で相手が喜んでくれる嬉しさ)

<考察>

5歳児は自分たちが水を流して滑ることを楽しんでしたが、4歳児が滑る時に水を流してあげると喜ぶのではないかと、相手の気持ちを考えて行動する姿が見られた。水を流すという自分の行動によって4歳児が喜んだり嬉しそうに笑ったりする姿を見て、嬉しさを感じ、自分の心も満たされた。

事例⑥『次はにじ組に勝つぞ!』5歳 そら組 10月

段ボールつみころゲーム(積んだ段ボールを、新聞紙を丸めたボールで倒す早さを競うゲーム)でにじ組と対戦するといつも負けており、「悔しいな」「どうやったら勝てるのかな?」と友達同士で話していた。(悔しい)(つまずき)「Mくんのボールはカチカチや」「Mくんみたいにボールを固くしたらいいんじゃない?」(提案)と、倒すことが得意な友達と同様のボールにすることで勝てるのではないかと考えた(予想)。「ガムテープなら強くなりそう」(予想)と、新聞紙ボールにさらにガムテープを巻き、段ボールが倒れやすいように固く改良し始めた(工夫)(試す)。それを見て、周りの友達も「僕もガムテープを貼ろう」「Mくんぐらいカチカチにしたらず倒せる」「いっぱい巻いたら重たくなってきた」と気付いたことを話しながらこだわりのボールを作り、「次はにじ組に勝つぞ!」と意気込んでいた(挑戦)。次の対戦では、初めて勝つことができ友達と喜びや嬉しさを共有していた(達成感)。

<考察>

負けたことをきっかけに「次こそ勝ちたい」という目的が生じそれは友達と共有のものとなった。同じ新聞ボールで強い友達がいることでその違いに目を向けたことで、気付きを伝え合ったり、ボールの固さを工夫したりするようになった。負けが続くという悔しさを友達と共有していたからこそ、勝った時の嬉しさをより大きく感じられた。

事例⑦『難しいんだよね』5歳児 にじ組 11月

N児とO児が、脚立や段ボールを土台にしてトイを繋げ転がしコースを作っていた。トイの先の地面には、セロハンテープの芯、コップ型の型抜き、掬う部分が四角く柄の長いスプーンを置いていた。2人は、ビー玉を転がした時に上からスプーンを落とし、ビー玉をスプーンに入れようと考えていた。「難しいんだよね」(困難)(挑戦)と言い、下から芯・逆さにした型抜き・スプーン(下向き)の順に置き(試す)(調整)、大きなビー玉をスプーンの上の部分の上に落とし、スプーンがトイを転がってきたビー玉をキャッチできるような仕掛けを考えた。①「ビー玉が転がってきた時に大きいビー玉を落としてスプーンに入れるってこと?」D児「そうなんだけど、スプーンが落ちちゃってバランスが難しい」と話していると、O児が「これで押さえる?」とダブルクリップを持ってきた。(提案)O児「いいね。これ(S字フック)もちょうどいいかも」(期待)と、スプーン(柄)にダブルクリップとS字フックを付けてバランスを取り、型抜きから転がり落ちないようにした。(調節)N児「ちょっと転がしてみて」E児が「わかった」とビー玉を転がすと、D児はタイミングを見計らい、大きなビー玉をスプーンに落としたが、スプーンが真下に落ちず、ビー玉は入らなかった。(失敗)N児「うまくいかないな。(残念)交代しよう」と今度はE児が転がし、D児がスプーンを落としてみるが、思ったようにスプーンが落ちずにビー玉は入らない。(つま

ずき)「またダメだ」と、言葉では残念そうな2人だったが、すぐに「しっかり支えた方がいいのかも」(予想)と、大きめの洗濯バサミを持って来て、スプーンの柄に挟み、何度もバランスを調整したりビー玉を転がしたりして、試した。(試行錯誤) (諦めない)

<考察>

難しいとわかっていることにも「こうしたらできるかもしれない」と期待したり予想したりしながら、挑戦することに面白さを感じていた。転がってきたビー玉をキャッチしたいという目的に向かって、予想通りにいかななくても原因や他の方法を考え、諦めずに道具の組み合わせやタイミングを試行錯誤していた。

<5歳児考察>

・ひととの関わりの中で、相手と自分は違う気持ちや感情があることが分かり、相手が「こうしたらほしいだろう」という気持ちを読み取り、行動していた。そして自分の行動により喜んでくれることを嬉しいと感じる姿が見られた。5歳児は、他者の感情を相手の立場で考えるようになり、思いやることができるようになると考えられる。

・遊びや活動の中で生じた目的に向かい、ものやことに関わった経験から見通しをもち、結果を求めて予想する、試す、確かめる等、思考する姿が見られた。その過程で予想外のことや思い通りにならないことをつまずきと感じることもあるが、思考する過程に面白さを見出し、つまずきを乗り越えようとした。明確な目的がある場合はその目的から逸れると負の感情になることもあるが、それを原動力に思考を繰り返し、目的を達成した時の嬉しさはつまずきの大きさに比例しており、つまずきや難しいことに諦めずに挑戦する姿につながっていた。そこには、気持ちを共有し、考えを出し合ったり提案を受け入れたりする友達(ひと)の存在が支えとなっていた。

5. 研究の成果

3歳児・4歳児・5歳児の事例から、子どもの心の動きをキーワード化し「感情」「思考」に分類、分析し、次のことが分かった。

3歳児では保育者との信頼関係をもとに安心感が生まれ、身近にあるものや目についたことに対し心が動く。それに対する子どもの行動(思考)とその行動によって起きた出来事を保育者が受け止め言語化し、その時の子どもの心の動きを価値づけていくことで、自分の気持ちを知ることにつながった。3歳児はもの・ことに対し行動すること自体が思考していることであり、その時に生じる様々な感情を蓄えていると考えられる。

4歳児になると今まで蓄えてきた自分の様々な感情や経験を活かして、自分を視点として相手の気持ちを想像したりそれを言葉にし、友達と共有したりすることができるようになる。また、不思議や疑問をもったことに対して、自分の経験や知識から想像するだけでなく、友達の考えを聞くことで想像を広げ、予想するといったことで思考の幅を広げていた。

5歳児では、他者の気持ちや感情を読み取り、相手の立場で考えられるようになることで、思いやることができるようになる。また、遊びや活動の中で生じた目的に向かい、結果を求めて今までの経験から見通しをもち、思考する姿が見られ、その過程にも面白さを感じる。つまずきや負の感情と出合うこともあるが、今までの経験の積み重ねがあることや、気持ちを共有し考えを出し合ったり提案を受け入れたりできる友達の存在があることで感情を整理し、目的に向かう感情を持続させながら行動する姿も見えてきた。

子どもの心は、3歳児では子どもが関わろうとする行動そのものが思考につながるものであり、それと同時に様々な感情に出合う。4歳児は今までの感情から想像を広げてひと・もの・ことをつなげていくことが思考することであり、考えの幅や視野を広げることに繋がっている。5歳児は感情を調整しながら、思考を繰り返し、ひと・もの・こととのつながり方を探ったり見出したりする。その際、新たな感情が生じることが分かった。

このことから、子どもの豊かな心とは安心感を土台にひと・もの・ことと出合い、それに対し行動する中で様々なことを感じ、価値を見出したり、それを他者と共有できるようになったりする。そして自分で感情や思考を使うようになっていき、新たな感情に出合っていくことであると捉えた。感情や思考が複雑につながりながら、広がり、深まり、満ちていくことで、豊かな心がより大きくなっていくと分かった。子どもの主体性を大切にしていくためには、子どもの心の動きを見逃さず、様々なつながりを保障していくことが大切である。

6. 今後の課題

子どもの心の動きを保育者間、子どもと、保護者との対話から検討してきたが、保護者とは保育者から伝える、保護者から伝えるといった一方向となっていた。今後は、保育者と保護者の双方向の対話を進めていく方法について検討し、実践していきたい。